

2012年度 湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」成果報告書

①大学生の間に発達障害への理解の輪を広げる～ボランティア体験プログラム～

②子どもに対するコーチング勉強会

環境情報学部 3年

本多希美

<活動の日時・会場>

①2012年11月15日～3月8日（各自それぞれ）

②2013年3月8日 13時～15時

<活動内容>

①NPO法人スマイルクラブが行っている発達障害児が多く参加する「運動が苦手な子の教室」での活動で、私が所属する東海林研究会のメンバーにボランティアを体験してもらい、普段あまり接する機会のない発達障害児たちと触れ合ってもらおうというもの。

★カリキュラムとボランティアの役割

スマイルクラブでのカリキュラムはおおよそ学校の体育の授業と合わせて行っており、学校体育の予習・復習という位置づけで利用している子どもが多い。発達障害児は自らの筋肉をコントロールすることが苦手であるため、総じて運動が苦手である。そのため、学校の体育についていけずに自尊心を傷つけるケースもしばしばで、運動から遠ざかってしまう子どもが多い。しかし、運動は身体的にも精神的にも生活を豊かにする要素である。したがって、適切なアドバイスのもと練習を重ねることで今まで出来なかったことが出来るようになる達成感や運動の楽しさを味わってもらい、彼らが運動の持つ特性を享受出来る環境を作ろうというもの。ボランティアは、彼らに適切なアドバイスをしたり、彼らのモチベーションを上げるような声掛けを行ったりしながら、子どもたちと一緒に運動をする補助的な役割を担う。今迄にボランティア体験に来た学生は何人かいたものの、皆一回限り訪れるだけで継続してボランティアを行わない現状がある。学生が継続してボランティアを行える環境を作るために何が必要なのかを、ボランティア体験をしてもらった学生にアンケートを取って、解明する。

②東海林研究会では子どもに関わる研究をしている学生が多くいるので、発達障害児だけに留まらず長年多くの子どものたちを見て、指導してきたNPO法人スマイルクラブの大浜あつ子理事長、学童保育施設アメリカ山ガーデンアカデミー松村理事長にそれぞれの研究を見て頂き、ご自身の経験を踏まえて様々なフィードバックをして頂くことで、子どもに対するコーチング/指導に学生がどのように関わっていくべきか理解を深めるという勉強会を実施した。

<本活動の目的>

発達障碍児に向けられる偏見やステレオタイプを無くし、より多くの学生に彼らへの理解を深めてもらうことを目的とする。現代社会において発達障碍を持つ子どもたちと大学生が関われる場は少ない。NPO 法人スマイルクラブが行っている「運動が苦手な子の教室」でのボランティア活動と、勉強会参加によって、大学生の心のバリアフリー化を促す。さらに、NPO法人スマイルクラブでは近年学生ボランティアの減少に悩まされており発達障碍児の社会的自立を支援する活動を維持継続していくために必要不可欠な学生ボランティアネットワークの構築にも繋げる。

<活動の成果>

この活動を通して以下のような成果を得ることが出来た。

a) 大学生の間に発達障碍に対する理解の輪を広げられた。

活動に参加する前は初めて発達障碍児に接する学生が多く、不安の声が多く聞かれた。しかし、実際に活動に参加すると学生たちはすぐに子どもと打ち解け、一緒に楽しく運動をすることが出来た。東海林研究会に所属するほぼ全員の生徒がボランティア体験プログラムに参加し、中には継続してボランティアを行いたいと何度も参加してくれる学生も出てきた。

b) ボランティアネットワーク構築の手掛かりを得られた。

今回大学生ボランティアに行ったアンケート結果や勉強会でのフィードバックを受けて、実際には子どもと運動をし、コミュニケーションを取るだけでとても楽しい活動なのに、外から見るとなかなか気軽に参加出来ない活動に見えてしまっていることが分かった。如何にして初めの一步を踏み出してもらうかが課題であることが明らかになった。

他にも、活動の内容自体にはとても満足度が高い反面、家から会場が遠い、それに付随して交通費などの経済的に厳しいという物理的な理由から活動に参加することを渋るケースが多いということが分かった。したがって今後は会場近くの大学に積極的に働きかけてみるなど、今回のプログラムは今後の方針を決める大きな材料となった。

